

1月1日 神の母聖マリア

民 6:22～27 ガラ 4:4～7 ルカ 2:16～21

1. ルカ

v.16 「そして急いで行って、マリアとヨセフ、また飼い葉桶に寝かせてある乳飲み子を探し当てた。」

「神を生んだ方」(テオトコス)マリアに授けられた“最高の役割と尊厳”(教会憲章 53)は、カトリック教会の信仰と典礼において卓越した崇敬を受けています。過去においてマリア信心が、過度な強調と偽りの誇張によって歪められたために、第二バチカン公会議は神の御業に対して“従属的なマリアの役割”(教会憲章 62)を明確にしました。

天使のみ告げを聞いて羊飼いたちが見たのは、普通の夫婦であるマリアとヨセフ、そして普通の乳飲み子イエスでした。他所の夫婦、他所の乳飲み子とは何か違っていたとは、語られていません。天使が告げたのは、主メシアである救い主がお生まれになったということであって、羊飼いたちはその神の言葉を信じて賛美しました。

v.19 「しかし、マリアはこれらの出来事をすべて心に納めて、思い巡らしていた。」

v.21 「八日たって割礼の日を迎えたとき、幼子はイエスと名付けられた。これは、胎内に宿る前に天使から示された名である。」

ルカ福音書の記述において、マリアは一登場人物であって、主役ではありません。カトリック教会の崇敬は、「母がたたえられることによって、子が正しく知られ、愛され、たたえられ、その命令が守られるようにするため」(教会憲章 66)であることを、理解しましょう。両親が、その信仰と従順の故に、二人で、幼子をイエスと命名しました。

2. ガラ

vv.4-5 「しかし、時が満ちると、神は、その御子を女から、しかも律法の下に生まれた者としてお遣わしになりました。それは、律法の支配下にある者を贖い出して、わたしたちを神の子となさるためでした。」

初代教会は、当時の異端である仮現説に反対して、キリストの真の人間性を擁護し、イエスがマリアから生まれたことを強調しました。ニケア・コンスタンチノーブル信条は、「聖霊によって、おとめマリアよりからだを受け、人となられました」と宣言しています。

「神はこのキリストを立て、その血によって信じる者のために罪を償う供え物となさいました。」(ロマ 3:25) 「神は……罪を取り除くために御子を罪深い肉と同じ姿でこの世に送り、その肉において罪を罪として処断されたのです。」(ロマ 8:3) 「神は唯一であり、神と人との間の仲介者も、人であるキリスト・イエスただお一人なのです。この方はすべての人の贖いとして御自身を献げられました。」(1テモ 2:5-6) ですから、公会議は「人々に対する母としてのマリアの役割は、キリストのこの唯一の仲介を決して曇らせたり

1月4日 主の公現

イザ 60:1～6 エフェ 3:2～6 マタ 2:1～12

1. イザ

v.1 「起きよ、光を放て。あなたを照らす光は昇り、主の栄光はあなたの上に輝く。」

新しいシオン(主の都エルサレムの別名)の上に、主の救いと栄光が訪れるというこの終末的な預言に、「おののきつつも心は晴れやかになる」(v.5)という高揚感を覚えることは、主の公現の祭日を祝う私たちにふさわしいことです。教会は、神の国がイエス・キリストと共に私たちのところに訪れてくださったことを、賛美しているからです。

神の国は、悔い改めてイエス・キリストを受け入れたすべての人々のところに、未だ最後の完成を待ちつつではありますが、すでに来ているのです。「しかし、わたしが神の指で悪霊を追い出しているのであれば、神の国はあなたがたのところに来ているのだ」(ルカ 11:20)と、イエスが言われたのを思い起こしましょう。

v.6 「こうして、主の栄誉が宣べ伝えられる。」

祭日や祝日だけでなく、根源の祝日と呼ばれる主日のミサは、神がキリストを通して私たちのために行われた終末的な救いの福音が、そこで常に新しく宣教される場であります。

2. マタ

vv.9-11 「彼らが王の言葉を聞いて出かけると、東方で見た星が先立って進み、ついに幼子のいる場所の上に止まった。学者たちはその星を見て喜びにあふれた。家に入ってみると、……」

東方から来た学者たちは、ダビデの町ベツレヘムで幼子イエスを拝みました。彼らはイエスの名声を聞いて、その場所にたどり着いたではありませんでした。神が、星の導きによって、彼らを母マリアに抱かれた幼子のいる場所に至らせました。神が彼らの心に喜びをあふれさせてくださったので、それがメシアであることが分かりました。

神の終末的な救いの舞台では、あくまでも父なる神が御業の主演であって、メシアすらも神の僕にすぎないということを、降誕の物語りは明瞭に伝えています。御子はまさにメシアであればこそ、へりくだって僕の身分になり、人間と同じ者にならなければなりません(フィリ 2:6-11)。

イエスはやがてその公生涯で“神の国の福音”を宣教されますが、それは決して、“その頃にイエスが始められた、地上に理想の社会を建設するという教え”ではありませんでした。確かに当時、イスラエル国家再建の夢をイエスに寄せるという期待が、弟子たちの中にあつたことは事実です(ルカ 21:21、使 1:6)。しかしやがて使徒たちの宣教において、それは明確に“神の秘められた計画”に置き換えられます。

聖書が伝える神の国は、王としての神の支配を意味しており、この世の歴史の外から介入される神の御業であることを、初代教会は理解しました。それは教会だけではなく全被造物が待ち望んでいるもの(ロマ

8:21-25)、終末論的な“神の秘められた計画”であります。イエスがこれを宣べ伝え始められたのは、その公生涯でのことですが、それ以前にすでに神の国はこの幼子と共に、「わたしたちの間に」(ヨハ1:14)来ていました。そして、星に導かれた東方の学者たちは、へりくだって人間の幼子の姿で誕生されたメシアを「ひれ伏して…… 拝み、…… 献げた」(v.11)のです。

3. エフェ

w.4-5「あなたがたは、それを読めば、キリストによって実現されるこの計画を、わたしがどのように理解しているかが分かると思います。この計画は、キリスト以前の時代には人の子らに知らされていませんでしたが、今や、“霊”によって、キリストの聖なる使徒たちや預言者たちに啓示されました。」

キリスト教は、多くの偉大な人々による新しい宗教的真理の発見によって築き上げられ、支えられて来たという判断があります。何よりもイエスが、これまでの一民族に限定されていたユダヤ教を、すべての民に救いをもたらすキリスト教に発展させたいという主張があります。しかし聖書は、キリスト教の内実は“キリストによって実現される秘められた計画”であって、以前には知られていなかったこの計画を「今や」(v.5)神が使徒たちに啓示された、と宣言しています。…… あなたは、そのどちらを信じているでしょうか。

つまり聖書は、救済史が、神による歴史の外側からの介入によって、その完成に至るものであることを証言しているのです。かつてアブラハムを通して、またダビデを通して神がイスラエルに与えられた約束が、「今や、キリスト・イエスにおいて、キリストの血によって」(エフェ2:13)、すべての民のものになったというこの“秘められた計画”こそが、キリスト教の中心的なメッセージなのです。

主の公現の祭日の主題は、救済史をその完成へと至らせる神の御業、すなわち“秘められた計画”です。私たち教会に「天に蓄えられている希望」(コロ1:5)を与えてくださった神を、賛美しましょう。「ただ、揺るぐことなく信仰に踏みとどまり、あなたがたが聞いた福音の希望から離れてはなりません。」(コロ1:23)

ハレルヤ、アーメン。

1月11日 主の洗礼

イザ 55:1~11 |ヨハ 5:1~9 マコ 1:7~11

1. マコ

降誕節の最後の主日は、原則として主の洗礼の祝日です。日本では例外として、主の公現の祭日が1月の7日か8日になる年には、その翌日の月曜日が主の洗礼の祝日になります。

マルコ福音書によると、天が裂けて“霊”が鳩のように御自分に降って来るのを、イエスは御覧になりました。そして天からの声を聞いたのも、イエスだけでありました。そこには取材中のジャーナリストがいた訳ではありませんから、それがどんな事件であったかを知ることは出来ません。福音書そのものは、その類の報道を伝えることに全く関心を持っていませんでした。恐らく弟子たちは、イエス自身の口からこの出来事とその意味を、後になって聞かされたものと思われま

v.11 「あなたはわたしの愛する子、わたしの心に適う者」

天からの声は、イザヤ書の“僕の歌”で歌われている“主の僕”とイエスを結びつけました。引用されたのはイザ 42:1です。「見よ、わたしの僕、わたしが支える者を。わたしが選び、喜び迎える者を。彼の上にわたしの霊は置かれ……」福音書記者が利用したギリシア語訳のイザヤ書は、今日知られているものとは、用語などが多少異なっていたようです。また詩 2:7の「お前はわたしの子、今日、わたしはお前を生んだ」の前半をも、天からの声は連想させます。

私たちにとって洗礼の日とは“新たに生まれた日”(ヨハ 3:3-8)であるように、イエス・キリストもこの洗礼によって、いわば秘蹟的な意味で“父の愛する独り子”として誕生したと、福音書は語っているのです。人間の姿で生まれた方は、父の独り子としてもお生まれになったのであり、この二つを切り離し得ないことを、降誕節の典礼暦は私たちに教えてくれます(ヨハ 1:14)。

2. |ヨハ

v.6 「この方は、水と血を通してこられた方、イエス・キリストです。……そして、“霊”はこのことを証しする方です。」

このテキストにはいろいろな異本があって、それはこの部分の読み方に古くからいろいろな対立する解釈があったことを暗示しています。元来「水と血」は、恐らくイエスの洗礼と十字架上の死を指していたと思われま

すが、他にも洗礼の秘蹟と聖体の秘蹟を指しているという解釈もあります。いずれにしても、私たちは洗礼によってキリストと共に死に(ロマ 6:8)、そして新たに神から生まれました(v.1)。この秘蹟を通して、私たちには神の証しが与えられました(v.9)。「その証しとは、神が永遠の命をわたしたちに与えられたこと、そして、この命が御子の内にあるということです。」(5:11) 教会が、このような特別な人々の共同体、新しい“神のイスラエル”(ガラ 6:16)であるという理解が、新約聖書を貫いてしま

す。

神から生まれた者とそうではない人とを明確に区別するという、初代教会の人々にとっては当たり前の考え方を前提にして、新約聖書は書かれています。このことを理解しないと、“兄弟を愛する”(4:20-21)という聖書の表現を正しく受け止めることが出来ません。教会共同体というものの愛による結束を動機づけたのは、イエス・キリストを信じる洗礼によって、お互いは“神から生まれた者”(v.1)であるということでありました。

主の洗礼の祝日に、私たちはイエスのヨルダン川での洗礼と、十字架の死の洗礼(マコ10:38-39)と、そして私たち自身が受けた洗礼とに、思いをはせます。

3. イザ

v.6 「主を尋ね求めよ、見いだしうるときに。呼び求めよ。近くにいますうちに。」

多くの人々が、終末や神の国のことを、人間の死後の世界のことでありたいと思っています。来世とは、来るべき世と書くので、人間が死んでからその後に来る“死後の世界”のことだというのが、通俗的な理解です。そして、そのような思いこみを聖書に押しつけてしまっている人が多いのです。

聖書の主張する終末論は、歴史の将来に実現し、神の救いの業が完成する、そのような終末の教義です。再臨のキリストは“生者と死者を裁くために来られる”(諸信条)のであって、だれも他の人より先に天国に入ったり、地獄へ行ったりはしません。

そうであれば、私たちは自分が神の恵みの中で生きている“今”というときを、真剣に“主を尋ね求め、神を呼び求める”ときにしなければなりません。キリストの福音は、ただ聞いているだけでは何の価値もなく、これを信じて救われ、確かな神の国の希望によって歩んでこそ、初めて力を発揮します。「福音は、ユダヤ人をはじめ、ギリシア人にも、信じる者すべてに救いをもたらす神の力だからです。」(ロマ1:16)

ハレルヤ、アーメン。

1月18日 年間第2主日

サム上 3:1~19 Iコリ 6:12~20 ヨハ 1:35~42

1. ヨハ

vv.35-36 「ヨハネは……、歩いておられるイエスを見つめて、“見よ、神の小羊だ”と言った。」

旧約聖書では、小羊はいろいろな意味合いで登場していますが、新約聖書の著者たちにはそのどれか一つではなくて、むしろすべてが影響しているように見えます。

「世の罪を取り除く神の小羊」(1:29)という表現は、先ず「罪を償う供え物」(ロマ 3:25)という意味であって、出エジプト記、レビ記、民数記において牛や山羊と並んで小羊が書かれています。主の僕の苦難を描いたイザ 53:7は エレ 11:19と同様に、償いの供え物ではなくて、単に屠り場に引かれて行く小羊を描いています。また主の晩餐(感謝の典礼)との関連で、キリストは過越の小羊としても理解されています(ヨハ 6:51-57、Iコリ 5:7)。

もう一つ重要なのは、創 22:8です。アブラハムは彼の愛する独り子イサクに言います。「わたしの子よ、焼き尽くす献げ物の小羊はきっと神が備えてくださる。」 神は“世の罪を取り除く小羊”として独り子イエスを世に送ることで、この約束を実現されたと、ヨハネ福音書は主張しているように見えます。

vv.35,37 「ヨハネは二人の弟子と一緒にいた。……二人の弟子はそれを聞いて、イエスに従った。」

ヨハネの言葉を聞いた弟子の二人が、ただイエスと仲良くなったとか言うような話ではありません。彼らは神のことば、すなわちキリストの福音を聞いたからこそ、直ちに「わたしたちはメシアに出会った」(v.41)と証言しました。そしてアンデレは自分の兄弟シモンをイエスのところに連れて行きました。

2. Iコリ

v.17 「しかし、主に結びつく者は主と一つの霊となるのです。」

私たちキリスト者は、主日やその他の日のミサに参加します。御聖堂には会衆席の他に三つの中心があるとされています(土屋吉正/ミサがわかる)。それは司祭席と祭壇と朗読台で、祭壇は感謝の典礼が執り行われる“主の食卓”であり、朗読台はことばの典礼が行われる中心として設けられています。キリストの代理者をつとめる司祭は、司祭席か朗読台で説教を行うように定められています(ミサ典礼書の総則 97)。

そこで私たちが“福音を聞き”、“イエス・キリストにお会いする”ということがなければ、「主に結びつく」ことも「主と一つの霊となる」ことも困難になります。振り返って、私たちはミサで福音を聞いているでしょうか。そこでキリストにお会いしているでしょうか。そのような問題意識が、もしかすると信徒にも司祭にも、これまで弱かったのではないのでしょうか。

1月18日付けのカトリック新聞に、ある外国人神父がカトリック学校でのミサの体験を書いていました。あるときは女子高生 400 人の内、カトリック信者は 3 人だけ、あるときは全生徒千人の内、信者は 6 人しか

いなかった。“信者ではない千人の生徒のためのミサ”に対して、司祭としていくつかの疑問と、納得できないところが増えてきた……とあります。「効率よく短い時間で済ませたい願望に負けて、ミサは形式的なものとなり、感謝の祭儀の恵み、主イエスの神秘に触れる時間は、カタカナタイトル行事のマニュアルに埋没している……クリスマスミサ。感謝の祭儀がかわいそう！」とても重要な問題提起です。

長年カトリック信者として過ごすことによって、神父様と仲良くなったとか、仲間の信者たちと親しくなったとか言うような話では、「ミサを生きる」(長江司教)ことにはならないのです。

v.14 「神は、主を復活させ、また、その力によってわたしたちをも復活させていただきます。」

そのように福音が説教されて来ただろうか、そのような信仰によって信者たちは結びついて来ただろうかと、考えてみましょう。

拝領前に一同で歌う“平和の賛歌”が、本当に会衆一人一人の信仰から出る祈りでありますように。

「神の小羊、世の罪を除きたもう主よ、われらをあわれみたまえ。」

3. サム上

少年サムエルは、祭司エリの家の罪を裁く神の言葉を聞きました。その一部始終をサムエルから聞いたエリは言いました。「それを話されたのは主だ。主が御目にかなうとおりに行われるように。」(3:18) やがてサムエルが主の預言者として信頼するに足る人であると、イスラエルの人々が認めた理由は、主が御言葉をもって彼に御自身を示されたということでありました(3:20-21)。

私たちの司祭や司教について、信者一人一人がそのような視点からこれを重んじ、尊敬することが出来ますように。また信者一人一人がただの受け身ではなくて、むしろ能動的に自ら聖書を通して神のことばを聞き、そのことによって“一つの信仰と愛に結ばれて生きることが出来ますように。”(今朝の拝領祈願)

ハレルヤ、アーメン。

1月25日 聖パウロの回心

使 22:3～16 Iコリ 7:29～31 マコ 16:15～18

1. 使

使徒パウロの回心は、紀元32年頃のことであったと考えられています。「パウロはキリスト教徒を厳しく迫害していたとき、ダマスコに向かう途中で神の光により目が見えなくなって地に倒れました。そしてためらうことなく、十字架につけられたかたの側につき、ただちにこのかたに従いました。」「パウロは自ら立候補したのでもなければ、人間的な仕事のためでもなく、ただ神の召し出しと選びのゆえに使徒となったのです。」(教皇ベネディクト十六世の講話から)

それから三年後、ペトロに会うためにパウロはエルサレムに上り、15日間彼のもとに滞在しました。そこで主の兄弟ヤコブ以外には他の使徒にも会わず、もっぱらペトロと話し合いました(ガラ 1:18-19)。パウロはそこで、初期のエルサレム教会の福音解釈を受け継ぎ、また私たちが共観福音書で読むイエスの生涯とその教えについての豊富な知識を得たものと推測されます。

イエスの死と復活という事実を、初期のエルサレム教会の使徒たちは聖霊に導かれて解釈しました(ヨハ 14:26, 16:13 参照)。そしてパウロもその後を継いで、イエスの事実の解釈者となったのです。イエスの事実は神の定めによって生じた終末的な出来事であって(エフェ 1:4-10)、以前の時代には隠されていたこの「秘められた計画」(ロマ 16:25、エフェ 3:5)を明らかにすることが、使徒パウロの使命でありました。

もし誰かが、パウロは素朴なイエスの教えを曲げて、独自の教会的キリスト神学に置き換えたというように主張するなら、それは軽率なことです。いわゆる“史的イエスとケリュグマのキリスト”という神学上の論争は、専門家でない信者にとっては“生兵法は大げがのもと”でしかありません。パウロは、人間的な動機で使徒になったのでも(ガラ 1:1)、新しい神学を構築したのでも(Iコリ 11:23, 15:3)ありませんでした。

2. Iコリ

v.29 「定められた時は迫っています。」

v.31 「この世の有様は過ぎ去るからです。」

実は“イエスカパウロか”という神学上の問題提起は、20世紀初頭に W.ヴレーデ によって言い出されたのが初めて、その後ブルトマンの“史的イエス”と“ケリュグマのキリスト”の分離へと展開しました。

しかし、もし教会が受け継いで来た聖伝と聖書を唯一の拠り所とするなら、そこでは原始キリスト教全体が救済史的観点から観察されていて、そこからイエスの死が、終末観的歴史解釈の線上で解き明かされているのです。ですから、私たちが教会の信仰(教会に平和を願う祈り)を学ぼうとするなら、その枠の中で“イエスの事実”の歴史的意義を理解しなければなりません。

聖書は、流し読みや拾い読みで、そこから簡単に神のことばを聞ける便利な書物ではありません。真面

目に学ばば学ぶほど、むしろ分からない部分や理解の困難な事柄がたくさん出て来ます。だからといって安易に現代風に再解釈してしまう誘惑に負けてはならないのです(IIペト3:16)。“使徒ペトロを軽んじるな、使徒パウロを愚か者と見なすな”と警告しておきましょう。彼は命をかけて神の福音を語ったのです(Iコリ9:16-23、IIコリ11:16-29)。

3. マコ

v.15 「全世界に行って、すべての造られたものに福音を宣べ伝えなさい。」

エルサレム教会の使徒たちは、イエスの苦難と死と復活の事実を、救済史における終末的出来事として解釈しました。パウロもその後を継いで、この事実を余す所なく解釈しました。そして使徒たちの時代が終わると、その後の教会はこの“使徒たちから伝えられたこと”を探求することによって、その真正性を維持する努力をして来たのです。

歴史の教会において、もはや司教も司祭も、神学者も一般信徒も、使徒ではありませんから、イエスとその福音についての新しい再解釈をすることは出来ません(神の啓示に関する教義憲章10)。もしあえてそのようなことを試みるなら、それは“一・聖・公・使途継承の教会”とは異なる、新しい別の宗教を創作することになってしまいます。

そうであれば、人はだれでも、使徒たちが伝えた福音を聖伝と聖書を通して学ぶことをせずに、“宣べ伝える”という行為をすることは出来ません。今日のカトリック教会の最大の弱点は、司祭も信徒も共に、福音を学ぶということを久しく怠って来たということではないでしょうか。

「耳を傾けて聞き、わたしのもとに来るがよい。聞き従って、魂に命を得よ。」(イザ55:3) 「今、何をためらっているのです。立ち上がりなさい。」(使22:16) どうか、主が私たちに憐れんでくださいますように。

アーメン、ハレルヤ。